



Suigara-yama_OoazaHyo(Kyoko_Umino)

2007-10-25

水ゆらぎ



▲ クロード・モネ《睡蓮》

「印象派とエコール・ド・パリ展」（日本橋三越、十月二日―四日）に行ってきた。B 6 のチラシのような券には、十九世紀前半から二十世紀後半までのフランス絵画の流れを吉野石膏コレクションから...とある。美術館ではないし、企業コレクションなので、小品ばかりかもしれない、とあまり期待せずに行ったが、うれしくも予想を裏切られ、やさしくおだやかなもの、水をもたらした。構成は印象派以前のミレーあたりから、印象派、フォーヴィスム、エコール・ド・パリと、時代を追ってのもので、へんてつもない構成だが、この流れがまずこちよかった。森から、ひらけた野原に出る、川に沿って歩く、すると河口が見えてくる、そんなふうで入りやすいのだ。ミレー、コローには、あまりひかれなない。なぜだろうかとも思う。その森は、水は、印象派に似ているのだが、冷たく閉ざされているようで、生きている感じができない。だからピサロ、シスレーになると、ほっとする。雲や水が息づいてくるようだ。そのぬくもりで、会場をあたためよう。そう、こんな感じだ、と彼らとの再会を感じる。彼らの絵が、そうしてもっとも親しい友人である彼をもうすぐ又私に引き合わせてくれる...。モネだ。モネは七点ある。《ヴェトウイユ、サン=マルタン島からの眺め》（一八八〇年）は、空と水と草花が、荒い筆で描かれている。特に草花は黄色や赤で点をうがたれているだけなので、何の花なのかかわからない。《ヴェルノン教会の眺め》（一八八三年）は川岸に教会、空や教会や家々が川面に反映している。この草、この空、この水、モネの筆で描かれたそれらをみると、いつもふるえる。まったく再会、完全な再会。モネの水に、わたしの水がにじむようだ。いや、モネの水をみることによって、わたしのなかの水が呼び起こされるのだろう、こんな風に水がふるえることがうれしいのだ...。そして《睡蓮》（一九〇六年）。夕暮れのような桃色の空が反映した池に睡蓮。よく見かけるモネの睡蓮だ。好きで、家にも大きな複製画が飾ってある。だから逆に食傷気味になっていて、この頃はなにかの展覧会でそれらの睡蓮を見ても、さして気にとめなくなってしまうていたものだった。だがどうしたのだろう。はじめて《睡蓮》をみたときの衝撃はなかったけれども（国立西洋美術館、松方コレク

Navigation

[Previous 月](#)
[Next 月](#)
[Today](#)
[Archives](#)
[Admin Area](#)

Categories

[All](#)
[General](#)

灰皿町の本

●[幻想小説『なめくじキーホルダー』清水鱗造](#)

●[「週刊読書人」詩時評 一九九二-一九九三年 清水鱗造批評集 第一分冊](#)

Search

ション。これは魔術的な出会いだった)、わたしのなかで水が波紋をひろげるのだった、呼ぶように、呼ばれるように。それは、初めての出会いで感じた噴出の水の体験を思い出させる、匂いのような感覚だった。あるいは、かつてみたすべての《睡蓮》と、わたしのみた夕景に重なるようだった。わたしのみた花としての睡蓮が、ではない。その水の反映の、空の桃色に、とてもひかれ、なつかしくなったから。そのなつかしさが、わたしのなかの水を揺らしたのだった。水の匂いが歓待する。

ルノワールはそれほど好きではないが、当時、腐肉のようだと批判されたあの肌の色を見るとどこかでほっとする。すこしばかり赤らんだ独特の肌の質感は、以前、ティーカップにすら、感じられたので、興味深く思ったことがあったが、今回も、それが家の壁に認められたので(《エッソワの農園》一九〇八年)、知人にまた再会したような、知人と友人のあいだぐらいいにいる人の、かわりのなさに出会ったような心地よさを感じた。そしてカタログやチケットを飾る《シュザンヌ・アダンの肖像》(一八八七年)、青い眼の少女。これはパステルなのだが、遠目には油彩のようにみえる。そして、その肌の質感は、たしかに油彩にくらべると軽やかなのだが、あたりまえなのだが、ここでも、ルノワールの肌なのだ、腐肉なのだ(もちろんいい意味で使っている)。再会のなかで、変わらない笑顔をみたような気持ちになる。

アルベール・マルケが二点あった《コンフラン=サント=オノリーヌの川舟》(一九一一年)、《ロルボワーズの風景》(制作年不詳)、どちらも川があり、重くめりたくったような水の色、すべてを映す反映というよりは、飲み込んで、その色たちになったかのような、あのマルケ独特の水の色に、やはり再会を感じ、うれしくなる。だがこちらはなぜだろう、さびしいような、重いような、そんな水を、わたしのなかで澱がかきまぜられたようなゆらぎを感じるのだが。

ヴラマンクも六点あった。つい最近ヴラマンク展にいったばかりだったので、先日話し込んだ友人とまた出逢ったようだった。《川辺の舟》(一九一一年)のよんだような川面に、マルケのそれともちがう(モネのそれは、やわらかな鏡のような反映だ)、激しさをひめた力を、ヴラマンクの水を感じた。《風景》(一九一一年)は、セザンヌ時代とよばれるときに描かれたとあり、立体的な山、橋、木に、セザンヌの量感との類似を思うが、その空、その山の色に、ヴラマンクの力ともいえる筆をやはり感じた。橋の下の水が、ゆたかに流れる。

ほかにも、たくさんの画家のものがあつたが、もう水がいっぱいになってしまった。わたしのなかの水がたぶたぶとゆれている。水に生かされている、ゆらけている...

会場を出て、展覧会カタログを買う。カタログはないだろうと思っていたので、うれしかった。おまけに中身が充実している。図版はもとより、図版解説、展覧されている絵画の歴史、作家略歴など、カタログの王道を歩んでいる。美術館の企画展のそれよりも、親切的な位だ。そう、以前はあちこちのデパートでよくこんな展覧会をやっていたものだったと、そして、こんな風なカタログが造られていたものだったとどこかで懐かしく思い出しながら、ページを開く。このコレクションは、これらの絵を含むもっと多いものが、山形美術館の常設で観れるらしい。記憶の箱にまた水をそそいで。

<http://www.mitsukoshi.co.jp/store/1010/lecoledeparis/>

(▲三越ホームページ、《シュザンヌ・アダンの肖像》などの写真が見れます)

00:01:00 - umikyon - No comments

2007-10-15

憂鬱な距離の自由

Login

ログインID:

パスワード:

☐ このPCを他の人と共用する

ログイン

Powered by





▲ルネ・マグリット《大家族》

「シュルレアリスムと美術展」(二〇〇七年九月二九日～十二月九日、横浜美術館)に出かけてきた。シュルレアリスム、といってもルネ・マグリットにばかりひかれてしまうのだが。会場に入る前、廊下ごしにちらっとマグリットの《大家族》(一九六三年)が見えた。チラシやポスターにはこの写真が載っていたのだが、それらを見ないで来たので、この出会いはふいうちでうれしかった。宇都宮美術館に所蔵されているので、いつか観に行こうと思っていたものだったから。ともかく、マグリットの作品のある展示室に改めて入る。《大家族》。曇り空と波打つ海。空に鳩のかたちが浮かび上がり、そのかたちの内側は羽毛ではなく、白い雲が浮かぶ晴れた空になっている。曇り空の方は夕方かもしれない。水平線近くの空がオレンジ色になっている。鳥と晴れた空が合体しているだけでなく、曇り空と晴天が同時にあること、真昼と夕方(明け方かもしれない)が同時にあること、そのありえなさたちの集大成としての絵に感銘を受ける。ここにはすべてが詰まっている。だから“大家族”なのだろうか…。そして、大きさについて。この絵は以前から知っていたが、実は“大家族”というからか、かなり大きいものと思っていたので、一〇〇×ハ一センチと、さほど大きくないことに意外さを覚えた。だが、それもふっとよぎっただけだ。絵の大きさが見る私を圧倒させるのではない、絵が圧倒させるのだから。けれども、画集などで見ただけではわからないものだとは思った。絵を前にして、直にどこかでふれあっているような感覚がおとずれる。《人間の条件》(一九三五)も画集で見かけて好きになった作品だった。この作品も、思っていたよりも小さいことに驚いた。二四×一九センチとハガキの倍位だ。もっと大きいものを観たい、と最初は思ったが、絵の持つ力の前で、すぐさまそんなことはどうでもよくなる。描かれているのはキャンヴァスと砂浜のある海景。キャンヴァスからはみ出て外の海につながっているのか、海と浜がキャンヴァスに入り込んでいるのか…。

迷路のような情景が、描くものの理想だと思わせもする。描いたものがそのまま対象と結びつくのだから。「この絵のなかでマグリットは写実と現実を混合させた」（『ルネ・マグリット』マルセル・パケ）。こうしてマグリットを見る感動のなかには、いつも言葉にしたくなる何かがつきまってくる。「思考を目に見えるものにするために、私は絵画を利用するのだ」とマグリットは言っている。《無謀な企て》（一九二八年）も、妻の裸体を描く画家がいる。というよりも描くことで、妻の肉体が造られてゆくのだ。ピュグマリオンのように、造ったものが命を持つ。これも、写実と現実の混合であるばかりでない、描いたものと描かれたものの境界をはずし、創造と生を一致させ、不可能を可能にしているのだった。絵は、腕を塗っている最中なのだが、その腕の絵の具の輝きが、塗りたてのようで、いま見ているこの瞬間に、生がうごめいている、あるいは瞬間がみるたびに瞬間と重なっていることで、永遠に連なっているかのように感じるのだった（実は、画集で見ただけでは、ここまで感じなかった。今まさに描かれつつある腕、といった面持ちのあの輝きを見るまでは）。だがマグリットはこうしたことが《無謀な企て》だと知りすぎほど知っている。「作品と目に見えるもののあいだの間隙」、距離を、彼は知っているのだから。あるいは知っているからこそ、その距離、その空間で、描いているからこそ、「超現実的な魔力をも浮上させ、現実を裏切る力」でもって、私たちを神秘を差し出してくるのだ、誘うのだ。この間隙はメランコリックだが（私たちは、決してひとつになれない）、自由をもそこに掲げている。裸体の女性の上半身が青く塗られ、彫像と生身の一致をさげすみ出す《生命線》（一九三六年）、画面上に空と海浜、砂から穴があき、そこから見えるのは、森、森の土からまた穴があき、家々が顔をのぞかせている《人気のあるパノラマ》（一九二六年）。空のような海の下に森がある、森の下に家がある、穴をつうじてメビウスの輪がくりひろげられ、見る私たちは画面から迷路におちいってしまう。こうしたありえなさを描くことで、現実や想像力をゆさぶり、「現実を超え、その現象が本来もっていた秘密をその現象自体から呼び起こし、人を惑わすような魅力を覚醒させる」のであった（「」内、前掲書）。距離を通して、現実のなかからエキスを拾い上げること。

またマグリットのことばかり書いてしまった。展覧会会場のテーマの一つとして、「風景」が掲げられていた。シュールレアリストの描く風景には水平線、地平線が数多いとあり、そのことについて、初期シュールレアリスムに参加したピエール・ナヴィルの言葉を紹介しているのが印象に残った。「彼は、ホルモンや神経に関係する人間の生理的な衝動は想像力とつながっているといえます。衝動のなかには想像力がいくつもの扉を開いていて、その扉の背後には「果てしない地平線しか存在しない」。そして「イメージが想像力となる際に記録するものは、まさにこの地平線なのだ」。（中略）人の内側にあって衝動を司る「自然」が、その人の想像力に働きかけて見せてくれる風景を忠実に写し取ること」（カタログより）。果てしない距離があるが、この試みは真摯だ。そしてまた、《大家族》《人間の条件》《人気のあるパノラマ》にも水平線、《生命線》には地平線があったと、その果てしなさを想うのだった。

横浜美術館 <http://www.yaf.or.jp/yma>

00:01:00 - umikyon - No comments

2007-10-05

行間の動く白



鎌倉大谷記念美術館で、『ヴラマンク展』（九月十一日～十二月八日）を見てきた。

モーリス・ド・ヴラマンク（フランス、一八七六—一九五八）、フォーヴィスム運動に参加したこともある画家。どこかで、彼の激しい白を見たことがあって、ずっと気にかかっていた。確か東京渋谷のBunkamuraミュージアムだったが、一九九一年に展覧会があり、今回の展覧会は、それ以来の個展だという。私は、その当時、まだ彼の存在を知らなかった。だが当時、電車の中吊り広告で見た覚えがあるのだ。ただ、中吊りのその絵にひかれた。その激しい壁の色に、激しい白さに。そのとき行けばよかった。だが、私はまだ人生では、なんともおなじものと出合えるとたかをくくっていた。一期一会ということばをすどおりできるほど、出会いは何度もやってくるような気がしていた。だから、今見に行かずとも、また、近々見ることもあるだろうと行かなかったのだ。それから何年か経って、彼の絵を数点、どこかではじめてちゃんと見た。荒々しいというのではない。その色の息づかいの激しさに圧倒され、しまった、あの展覧会に行けば良かったと思ったのだ...

この頃気にかけているアルベール・マルケと同じ野獣派に属していたこともあったので、マルケを調べているうち、ヴラマンクの名前も出てきた。だから、マルケの画集なり展覧会図録などを探そうと、ヴラマンクのそれも調べてみたが、こちらは画集はおろか、展覧会図録も手に入れることが出来なかった。そして展覧会は、十六年ぶり。一期一会なのだ。この機会を逃したら、またいつ会えるとも限らない。だから今回は、ぜったい行こうと決めていた...。今ここにある、出合える限りの出会いを大事にしようと思ったのだ。

そして、ここ、鎌倉大谷記念美術館で。出展は二十三点と少ないかもしれない。

だが、彼の様々な白をうかがい知ることができた。それは彼の絵をかつて見た、その思い出のなかにある白とまざりあい、力をもって、私に語りかけてきたが、それは白ばかりではなかった。緑、黄色、青、色彩のすべてが力を持っていた。荒々しいと称されるが、それともすこし違う。《花—ひなげしとジロフレ》（一九五五年）は、静物画。花瓶にひなげしたち。静物画は西欧では、伝統的に動かない、死んだものの意味合いが強いというが、花が生き生きと力を持っている。力を凝縮させて、そこそこに留まっている、といった感じでもある。《秋の風景》（一九五〇年頃）は、黄色い積み藁と青い空。積んだ藁も生き生きとしている。その黄がのたうちまわるようだった。だが、その藁に（あの花瓶のひなげしたちにも）生が投影されているのだ。その生と観る者の生が共鳴しているのだ、と思った。雲の白が、かつて見た彼の絵の印象のとおりうねっている。白は静かな色ではない、動く色、おのおのの印象を投影する流動的な色なのだった。ちょうど白い紙の上に描かれた文字、筆によって、自由な躍動が生まれるように、行間をとおして、空白をとおして、わたしたちがそこにもぐりこむことができるように。《ポプラ並木》（一九五〇年）では、並木に荒くめられた暗緑色、黄色に、風を感じた。ここでも雲がまざまざと白い。そして、それもまた、風を塗りこめていた。風を孕んでいた。白から吹きすさぶ風が、わたしと、並木と、遠くの森を、つらぬくよう吹いていた。そして、《アルジャンタンの村》（一九二六年頃）。青い白い空に、白い壁をもつ家々、中央にくすんだ道が伸びている。この絵の第一印象が、いちばん、かつて私がみたであろうヴラマンクたちを彷彿とさせるものだった。いい悪いではなく、この白い壁、白い雲が、いちばん、彼を感じさせたのだ。白い壁は、厳密に言えば白ではない。茶色、灰色、褐色が混ざっている。その白い混ぜものに、十六年の歳月の間にみたヴラマンクの数点の絵が、中吊りポスターが、投影されていたか、混ざり込んで見えたのだ。雲もまた波打つように動をはらんで流れるのだった。

残念なことに展覧会図録はなかった。作品リストをもらい、ヴラマンクの絵はがきを数枚買った。アルペール・マルケは展示されていなかったが、絵はがきが売っていたのでこちら一枚買う。私の小さなマルケ・コレクションはこうして少しずつ増えてゆく。ヴラマンクも増えてゆくだろう。

写真《花—ひなげしとジロフレ》《アルジャンタンの村》

鎌倉大谷記念美術館

<http://www.komam.co.jp/2007/2007autumn.html>

（写真もここから転載しました）

00:01:00 - umikyon - 1 comment